

《研究ノート》

中央アジアの現状とウズベキスタンの産業展望
— ナボイコンビナートの観光事業への試み —

THE PRESENT CONDITION OF CENTRAL ASIAN COUNTIES
& REPUBLIC OF UZBEKISTAN'S INDUSTRY SURVEY
— NAVOI KOMBINAT'S TOURISM BUSINESS CHALLENGE —

三橋 勇

Isamu MITSUHASHI

Abstract

The Soviet Socialist Republic formally disappeared on December 21, 1991 after a meeting with the representatives of the eleven republics. Each republic became independent by boiling the slogan of democratization.

There are five republics located in Asia with an Islamic culture; they are Kazakhstan, Uzbekistan, Turkmenistan, Tajikistan, Kyrgyzstan, and they are considered countries of Central Asia.

Of these countries of Central Asia, Uzbekistan Republic is said to be the country to have the best possibility of development due to its political and agricultural production stability.

One of the greatest challenges that Uzbekistan Republic has is the growth of its industrial tourism by finding new ways of exploiting the tourism resources with the use of foreign investment. A new tourism resort design must be created in order to transform the present condition. The Silk Road Sightseeing is the main expansion challenge in the present.

The development of the future tourist industry in this area has started the trend of managerial union of Navoi industrial complex.

Key Words : Collapse of The Soviet Union, Published Information, International Society,
Foreign Investment, Japan International Cooperation Agency(JICA)
Utilization of Industry Establishment, Silk Road Tourism,

キーワード : ソ連邦の崩壊, 情報公開, 国際社会, 海外投資, 国際協力機構,
企業施設の活用, シルクロード観光

はじめに.

ソ連邦（ソヴィエト社会主義共和国連邦）解体後、1990年代のはじめにロシアの諸影響を受けながらもイスラム文化社会圏の中央アジア諸国は、独立をしていった。市場経済システム移行過程での経済的問題は多く出てきたものの最終的な経済破綻に落ち入ることがなかったために、タジキスタン共和国を除けば比較的政治面での安定は保たれてきた。中央アジア諸国の独立国として歩んできた10数年にわたる政治の流れと産業構造の変化の現状を、10年の計として政治、経済、国際社会などに1998年からの本プロジェクトチームの現地調査資料などを加え分析を試みる。また、今後の各産業の国際的な生産地がどのように変化して行くか推測が付かないという前提から、同地域国の比較の中で推察するウズベキスタン共和国の可能性を導き出そうとするものである。さらに、最近における地下資源に対する海外からの注目、農業への外資導入の動向などから、この地域における眠れる獅子と言わしめるウズベキスタンの展望を占う。加えて、この国の各工業、鉱業を一手に支えてきたナボイコンビナートの外資系へのアプローチと企業群による観光事業構想に参画を試みる中で、国内観光の一边倒な“シルクロード観光”から脱皮への挑戦をして拡大の方法を導き、ウズベキスタンの観光事業拡大に貢献をすることを旨とする。

I. 中央アジアの産業情況比較

ソ連邦は、1991年12月21日にモスクワにおいて、11の共和国首脳会議が開かれ正式に消滅したのであった。その時期と前後してソ連邦を形成していた各共和国は民族の自立と民主化のスローガンのもとに独立をしていった。地理的にアジア地域に位置し、ソ連邦の中でのイスラム文化社会圏を構成していた5共和国も他の共和国と同様な道を歩むのであった。後に、中央アジア5カ国と呼ばれるようになったカザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、キリギスタンの共和国である。

ソ連邦時代のこの地域の5連邦には政策的な産業分離が課されていた。独立国後は各国独自の産業育成の方法に方向転換をしてきたものの、地域の適正にあったものとソ連の中央政府の政策下での産業投資、技術指導を超越するまでには、各国の諸レベルが向上していないのが現実である。しかし、この地域における大きな流れとして独立をして約12年を経過するなかで、各国の産業に特徴を見出そうとする対外的な動きが活発になってきた。経済的自立のためには前向きな方向として評価する反面、国際市場の精通に欠ける点から、将来の発展の可能性があるとだけでは、安閑として見ていられないというのが現実であろう。

カザフスタンを筆頭に、この地域における地下資源は、他の地域や国が羨むほどの石油、石炭、天然ガス、ウラン、マンガン、鉄鉱石、クロマイト、リード、亜鉛、銅、ボーキサイト、水銀、金、銀、他というような豊富な種類と恵まれた埋蔵量を誇っている。

a. キルギスタン共和国

キルギスタンは素晴らしい自然の美しさを持ち、伝統的な遊牧民であることを誇りとする中央アジアの国で、1864年にロシアによって併合され、1991年にソ連邦から独立をした。今日の課題は国有企業の民営化、民主主義と政治的な自由の拡大、民族間の関係とテロリズムへの対応である。経済的には旧体制的な方法から脱皮しきれておらず、基幹とする産業の育成とその計画が同地域の他国と比べ進んでいないのが現状である。近年の貿易相手国を見ると、徐々にCIS諸国から欧米や隣国の中国に物流が開かれてきていることが窺える。しかし、まだまだ国際機関の助成や他国援助が必要を思われる。

キルギスタンは農業主体の小さい貧しい山国である。綿花、羊毛、肉という農産物が主な輸出品である。その他では、金、水銀、ウラン、電力が輸出されている。市場改革を実行することにおいてキルギスタンはソ連邦の中で最も進歩的な国の一つであったことと経済安定プログラムが功を奏し、1994年に88%だったインフレは1997年には15%に引き下げられた。その後は経済成長重点の政策に移り、政府の持ち株の多くは民間に売却されていった。1991年12月のソ連崩壊後、経済は大きく低下したが1995年半ばには生産が回復し、輸出が拡大し始めた。1996～97年、海外投資は経済復興にかなりの役割を演じた。しかし、相変わらず年金受給者、失業者している労働者と給料が滞納している国家公務員は苦しみ続けている。ロシア経済危機を主因に1998年の経済成長は2.1%にとどまったが、1999年3.6%、2000年5.7%と好転している。政府は負担の大きすぎる対外債務、インフレ、税収の回収問題に対し、一連の法案を採択した。

表1 キルギスタン共和国関係資料

《前年同期比%表示》

*2003年は上半期

	1998	1999	2000	2001	2002	2003
GDP	2.1	3.7	5.4	5.3	-0.5	2.3
工業生産	5	-4	6	5	-13	2.5
農業生産	3	8	3	7	3	-3.4
資本投資	-36	22	37	-14	-12	-6
貨物輸送量	-1	15	5	-3	5	11
小売売上高	11	1	7	6	8	11.6
工業生産物価指数	9	54	32	11	6	6.4
CPI	10	36	19	7	2	3.1
輸出 (CIS 諸国)	-28	-21	13	-17	0.1	10.6
輸入 (CIS 諸国)	-0.5	-4	10	4	3	-4.8
輸出 (CIS 諸国)	1	-41	15	-14	26	9.6
輸入 (CIS 諸国)	47	-15	-25	-18	26	11.7

資料：CIS 統計委員会、UN 世界統計年鑑

b. タジキスタン共和国

タジキスタン（タジク）はソ連邦から1991年に独立を果たした時から、3回の変革と5年の内戦を経験してきた。ライバルの派閥間の平和合意が1997年に署名され、実際にそれが実行されたのは1999年の末であった。1999年に行われた選挙に先立ち、当時の政府に反対の立場をとっていた政党の合法化が行われることになったが、そうした政党の政府への参加は殆んど受け入れられなかった。同国内の犯罪、暴力行為などの多発情況が、安全・平和を求める国際社会からは好ましい国家として認められるに至っていない。経済的な数値、指数においてはこの地域の国で一番下に位置し、長期にわたる消費者物価の高騰が国民生活を苦しめている。

タジキスタンはソ連邦時代も15の共和国の中で一人当たりのGDPが最も低い国であり、今尚、綿花がこの国における最も重要な収入源となっている。また、鉱物資源は限られた量ではあるが、金、銀、タングステンを産出している。産業としてはアルミニウム工場が1つ、水力発電、軽工業、食品加工が若干ある。同国経済は6年の内戦、モスクワからの助成金の打ち切り、モスクワ市場の喪失により大幅に遅れをとった。国民の大部分が厳しい貧窮の生活状態にある。タジキスタンは、ロシア及びウズベキスタンから支援と国際的な人道主義者の援助に基本的な生存を支えられている部分がある。この国の経済の将来と海外投資を引き付ける可能性は国内政治の安定化と労働者の技能教育の向上にかかっている。

表2 タジキスタン共和国関係資料

《前年同期比％表示》

*2003年は上半期

	1998	1999	2000	2001	2002	2003
GDP	8	3.7	8.3	10.2	9.1	8.6
工業生産	8	6	10	15	8	11.7
農業生産	6	3	13	11	n. a.	n. a.
資本投資	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.
貨物輸送量	3	-11	5	-2	-0.4	0.7
小売売上高	9	4	-21	2	174	32.6
工業生産物価指数	30	44	44	27	9	14.5
CPI	43	26	24	37	10	17
輸出 (CIS 諸国)	-26	55	19	-43	-11	-39.8
輸入 (CIS 諸国)	-17	-5	10	7	25	16
輸出 (CIS 諸国)	-7	15	9	-4	1	-7.7
輸入 (CIS 諸国)	-1	-44	-22	30	15	18.3

資料：CIS 統計委員会, UN 世界統計年鑑

c. カザフスタン共和国

人種的に生まれつきのカザフ人、13世紀に地域に移住したチュルク系、モンゴル系の遊牧民は一つの国として統一されたことは、ほとんどなかった。この地域が18世紀にロシアに征服され、1936年にソ連邦の一共和国となった。1950年代、1960年代、農業の「処女地」プログラムにより、ソ連邦内の人民をカザフスタンの北部の牧草地開拓に移住を促した（シベリア地域の朝鮮民族系は強制的に移住を強要された。それらの関係者は、カザフスタンに10万5千人、ウズベキスタンに15万人、さらに残りの中央アジア諸国に5万人と言われているが、独立後の市民生活の全般にわたる民族主義的傾向の高まりに朝鮮人の国外流出が続いている。彼らの流出先はロシア、並びに CIS 諸国外の遠外国となっている）。これにより、同地域で様々な民族が同居することになり、ソ連時代はカザフスタン国内でもカザフ人が必ずしも大勢を占めていなかった。独立後、このような移住の背景を持った人達は自己の選択として、カザフスタンから元来の出身地へと戻った者が多い。今日の課題は、国家のアイデンティティを高めること、巨大なエネルギー資源の開発と国際市場への輸出、近隣諸国、海外諸勢力との関係強化である。

カザフスタンは、領土ではソ連邦を形成する共和国連邦の中で2番目に広く、鉱物、金属の豊富な資源と同様に大量のエネルギー資源を埋蔵し、家畜と穀物でも大生産地となっている。工業部門はこれらの天然資源の採掘と加工、建設部品、トラクター、農業機械、軍需産業に関わりを持つ機械工業から成り立っていた。1991年12月のソ連邦の崩壊とそれによりカザフスタンの伝統的な重工業プロダクトに対する需要の激減を生み、1990年代前半（特に1994年の経済悪化をもたらした。1995～97年で、経済改革と民営化の政府プログラムが加速され、民間部門への資産シフトが進んだ。西カザフスタンのアティラウ、テンギス油田から黒海までの新しいパイプラインを構築するカスピ海パイプラインコンソーシアム合意により、この数年で石油輸出の大幅拡大の可能性が生まれた。カザフスタンの経済は下落した石油価格とロシアの8月金融危機のために、1998年の経済成長率は再び2%ほど下降したが、1999年の国際的な石油価格の回復状況での通貨テンゲの切り下げと穀物の豊作により2000年には経済は回復をした。カザフスタンは、軽工業を発展させることによって石油に大きく依存した経済から脱皮を図ろうとしている。無論、それをフォローするのは、欧米の石油メジャーと産油プロジェクトを組んでいる豊富な埋蔵量を誇るアティラウ油田ということを忘れてはならない。また、ソ連時代の長期に渡り、原爆の実験・宇宙開発の基地として培われた高度な化学、科学技術力を有していることも同様である。

表3 カザフスタン共和国

《前年同期比%表示》

*2003年は上半期

	1998	1999	2000	2001	2002	2003
GDP	-1.9	2.77	9.8	13.1	9.5	10.2
工業生産	-2	3	16	14	10	9.6
農業生産	-19	28	-4	17	3	5.2
資本投資	42	33	49	45	19	13
貨物輸送量	-2	1	31	12	13	17
小売売上高	19	2	5	15	8	9.9
工業生産物価指数	0.8	19	38	0.3	0.3	15.6
CPI	7	8	13	8	6	6.7
輸出 (CIS 諸国)	-2.7	-31	59	11	-16	29.5
輸入 (CIS 諸国)	-7	26	64	-11	24	56.98
輸出 (CIS 諸国)	-12	-22	72	20	-8	24
輸入 (CIS 諸国)	16	-9	10	30	13	14.6

資料：CIS 統計委員会, UN 世界統計年鑑

d. ウズベキスタン共和国

ロシアは19世紀末にウズベキスタンを征服した。第2次世界大戦後、赤軍に対し厳しい抵抗を行ったが鎮圧され、社会主義の共和国が1925年に設立された。ソ連時代の「白い金」(綿花)と穀物の集中的な生産により、アラル海・大河川の水質源の枯渇及び土壌の悪化を招いた。1991年の独立後は鉱物・石油資源を開発する一方、段階的に農業への依存を減らそうと努めている。長年にわたり課題とされてきたタジキスタン、アフガニスタンに本拠を置くイスラム過激派への対処であったが、2001年10月の米国・アフガニスタン戦争により南に国境を接するアフガニスタンのイスラム過激派との問題は解消した。また、民主化の拡大の進展であるが、独立当時の共和国の指導者が若かったため独立12年を経た現在も、カリモフ大統領執行部体制が政権を動かしており大きな世代交代は行われていない。しかし、幾許かの民主政治の進展と政治家の世代交代の兆しは見せ始めている。

ウズベキスタンは乾燥した内陸国で、国土の10%が耕作地である。その住民の60%以上が密集した人口の多い田舎の共同体に住んでいる。ウズベキスタンは現在も世界3位の綿花輸出国、地下資源では金、銀、石油、他などの大生産国でもあり、化学物質と機械の生産国でもある。1992年12月の独立後政府は生産と価格に対し、助成金と厳しい中央政府命のトップダウンコントロール(ソ連スタイルの統制)で急場を凌ごうと努めた。しかしながら、高いインフレ率に直面した政府は1994年半ばに金融引き締め、民営化、経済における国家の役割の強化、海外投資家のための環境改善といった重要な経済改革を開始した。国家の経済への影響力は依然強く、

改革の推進は遅れている。IMF は政府改革がその条件を満たさないことから1996年末にウズベキスタンへの1億8,500万ドルのスタンバイ・アレンジメントを延期した。ウズベキスタンはアジア・ロシアなどの金融危機という困難な対外条件にロシアをモデルとした閉塞経済の下、通貨の統制により対応してきた。この時に行った海外からの投資を拒否した経済政策が、経済低迷の主な原因となっている。拡大する累積負担、長引くインフレの克服の遅れが2000年以降のビジネス環境の改善に結び付かず、経済成長は下降気味に推移してきたが、ここ数年は海外からの投資傾向が見られるようになってきた。課題も多いが総体的な将来の可能性は、地下資源と豊富な労働力を背景に中央アジア諸国ではトップクラスと思われる。

表4 ウズベキスタン共和国

《前年同期比%表示》

2002年は1-9月

	1997	1998	1999	2000	2001	2002
GDP	5.2	4.4	4	4.5	4.5	3
工業生産	4	4	n. a.	n. a.	8	7.8
農業生産	6	4	n. a.	n. a.	n. a.	2
資本投資	17	15.	n. a.	n. a.	n. a.	2
貨物輸送量	0.1	-0.1	0.4	n. a.	-0.4	n. a.
小売売上高	13	14	10	5(1-9月)	17.4	3.6
工業生産物価指数	54	41	38	n. a.	9	n. a.
CPI	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.	10	n. a.
輸出 (CIS 諸国)	50	-41	n. a.	n. a.	-11	n. a.
輸入 (CIS 諸国)	-19	-10	n. a.	n. a.	25	n. a.
輸出 (CIS 諸国)	-25	-24	n. a.	n. a.	1	n. a.
輸入 (CIS 諸国)	-5	-26	n. a.	n. a.	15	n. a.

資料：CIS 統計委員会、UN 世界統計年鑑

e. トルクメニスタン共和国

トルクメニスタンは1865年から1885年までロシアによって統合されていたが、1925年にソ連邦の一共和国となり、1991年ソ連邦崩壊後に独立した。大統領ニヤゾフは絶対の力を維持し、反対は容認されない。もし、開発と輸送問題が解決されれば、豊富な天然ガスがこの発展途上国に大いなる恩恵をもたらすことになる。

トルクメニスタンは灌漑されたオアシスにおける集約的な農業地を持ち、莫大な天然ガス資源（世界5番目）と石油資源を持つ砂漠国である。その灌漑された土地の二分の一で世界10番目である綿花生産が行われている。1998年来まで同国は石油と天然ガス価格が高めであったこととハードカレンシー（兌換通貨制度）を拡大したことにより、他の旧ソ連諸国ほど経済の落

ち込みはひどくなかった。1994年、ロシアがハートカレンシー市場への同国天然ガスを輸出することを拒絶、また、ソ連邦を形成していた国々の天然ガス代金払い延滞により工業生産の大幅低下、予算の赤字化を招いた。前共産主義者により権威主義体制と部族的社會構造により、同国の經濟改革は用心深いものとなり民営化は限定され、非効率的な經濟を維持するために天然ガスと綿花の売却を利用するという方向に進んだ。1998年～2000年に天然ガスの輸出ルートが依然不足していることや増大する對外短期債務の支払いに苦しんだが、総輸出高は國際石油、天然ガス価格の上昇により急増した。しかし、近い将来の展望は国内の貧困、對外債務負担から見て明るいものではない。このように現実を考えれば IMF 援助が必要となるが、トルクメニスタン政府は IMF 条件を現時点で受け入れる予定はない(国外からの内政干渉回避の意味も含み)。1999年のロシアの Gazprom パイプラインによる天然ガス200億立方メートルの取引は、2000年の會計の不足を軽減するのに役立ったが、その後の不適当な予算支出、2001年の天然ガス取引の引合いの手薄状態は、現実的な經濟改革の遅れと共に短期的な經濟問題を引き起こす要因となる。今後の国政を遂行する上で、この負荷が大きな經濟的な発展の足かせとなると思われる。

表5 中央アジア諸国の基礎データ比較

《率は前年度比較》

2000年ベース

	ウズベキ スタン	カザフ スタン	キリギ スタン	タジキ スタン	トルクメニ スタン
人口(単位千人)	24,756	16,731	4,7536	6,579	4,600
人口増加率(%)	1.6	0.03	1.44	2.12	1.85
GDP(億ドル)	600	856	126	73	196
1人当りのGDP(ドル)	2,400	5,000	2,700	1,140	4,300
GDP実質成長率(%)	4.5	10.5	5.7	5.1	16
産業生産成長率(%)	6.4	14.9	7%	10	18
消費者物価指数(%)	40	13.4	18.7	33	14

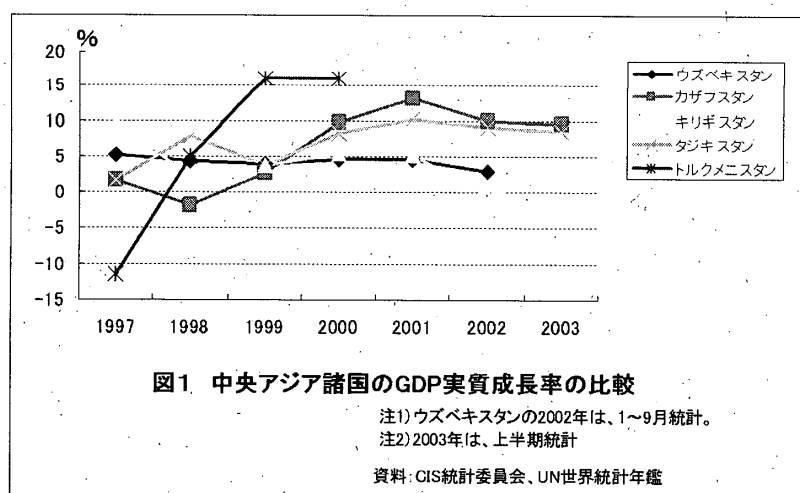
資料：CIS統計委員会、UN世界統計年鑑

f. 中央アジアの現状分析から

中央アジアの眠れる獅子と言われるウズベキスタンは、中央アジア5カ国の中においてソ連邦時代、また、独立後も目立った産業投資もされず農業を中心として、鉱業、そして科学・工業がこの国の經濟を支えてきた。經濟成長は上下変動の激しい他の地域諸国と異なり海外からの目立った資本投下がない状況で独立後5%前後の經濟成長を続けてきた。最近、ソ連時代はベールに包まれていたこの国の金を中心とした鉱山地下資源が評価され、ウズベキスタン唯一

のナボイコンビナートが海外投資家及び海外企業の注目を浴びてきているようである。今後、この地域がウズベキスタンという国の諸事を中心に参画していくものと思われる。また、政府の経済方針及び民主化の推進、外資誘致の環境設定が進展し国際社会からの信頼を得られるならば、安定した食糧供給システムと食料生産能力基盤を持ち約2,500万人の人口を有するこの国の将来は諸生産物の増加からの国民生活の向上が窺える。

注) 耳慣れしているコンビナート (Kombinat) という言葉は元来ロシア語であり、日本では第二次世界大戦後に重工業を中心とした政策の一環として臨海工業地帯において大企業の大工場間で形成された。英語では、コンプレックス (Complex) ということ言葉を一般的に使っている。



II. ウズベキスタンの地域動向と目論見

独立12年を経過した現在も政治は安定しており、独立当時と同様にカリモフ大統領執行部体制が継続している。しかし、ここにきて長期の安定政権における負の問題点も発生してきている。特に、独立後の混乱期を柔軟にコントロールするために行われていくはずであった段階的な情報公開が、いつの間にか滞って国の健全な発展に影を投げかけている事実もいめない。経済動向から見ると、土壌に恵まれた農業が国の基幹産業ということに変わりはないが、近年は欧州、イスラエルなどからのナボイ近郊への農業技術移転や農業投資が盛んになってきており、農業の国際化が進んできていることが窺える。また、ここにきて飛躍的な鉱山技術の進歩があり、採掘限界や未開発となっていた鉱物資源にも内外から注目を浴びるようになってきており、ウズベキスタン共和国の第一次産業は、徐々に国際的な認知を受ける方向にあるといえよう。ここにウズベキスタン共和国の最近の鉱業を中心とした第一次産業動向の紹介と新規地域観光地の組合せの形態形成及び“脱シルクロード観光構想”の一考に関わってみる。また、特に、ナボイコンビナートの現在使用されていない旧国家体制下に建築された高級幹部及び幹

部用住居用などの企業施設の活用方法を考察するというテーマも課せられている。

a. ナボイコンビナート

ナボイはウズベキスタンの中央・南部地区に位置して最近では交通の要所ととなっている。鉱物資源は、ウチダック (Uchquduk) とザラフシャン (Zarafshan) に集中し、莫大な埋蔵量を誇る金鉱山には、世界の鉱業関連企業が注目している。ナボイ地域の最も重要な区画は、NMMC (Navoi Mining and Metallurgical Complex) という企業が占有しており、この鉱業企業は、巨大な金鉱山とウラン鉱脈を保有する。特に、NMMC の金抽出技術は世界最高のレベルを持ち、金山や他の鉱山運営の安定に大きな貢献をしている。このような諸背景をもとにナボイは質の高い金を近隣諸国及び国際市場へ供給している。ここから産出される金によりウズベキスタンの独立が維持され、社会の平和は保たれ、安定した福祉向上が図られているといっても過言ではなくなっている。キジルクム (広域な中・西部地域でカラ・カム砂漠がある) に豊富な鉱物資源が存在していることは明白であるが、正確な埋蔵量は明らかにされていない。ただ、これらの鉱物資源は、この地域の経済発展、産業振興、都市化などに有用であることは間違いない。これらの豊富な鉱物資源の開発は内外の巨額な資本と高速道路網、鉄道、電力、

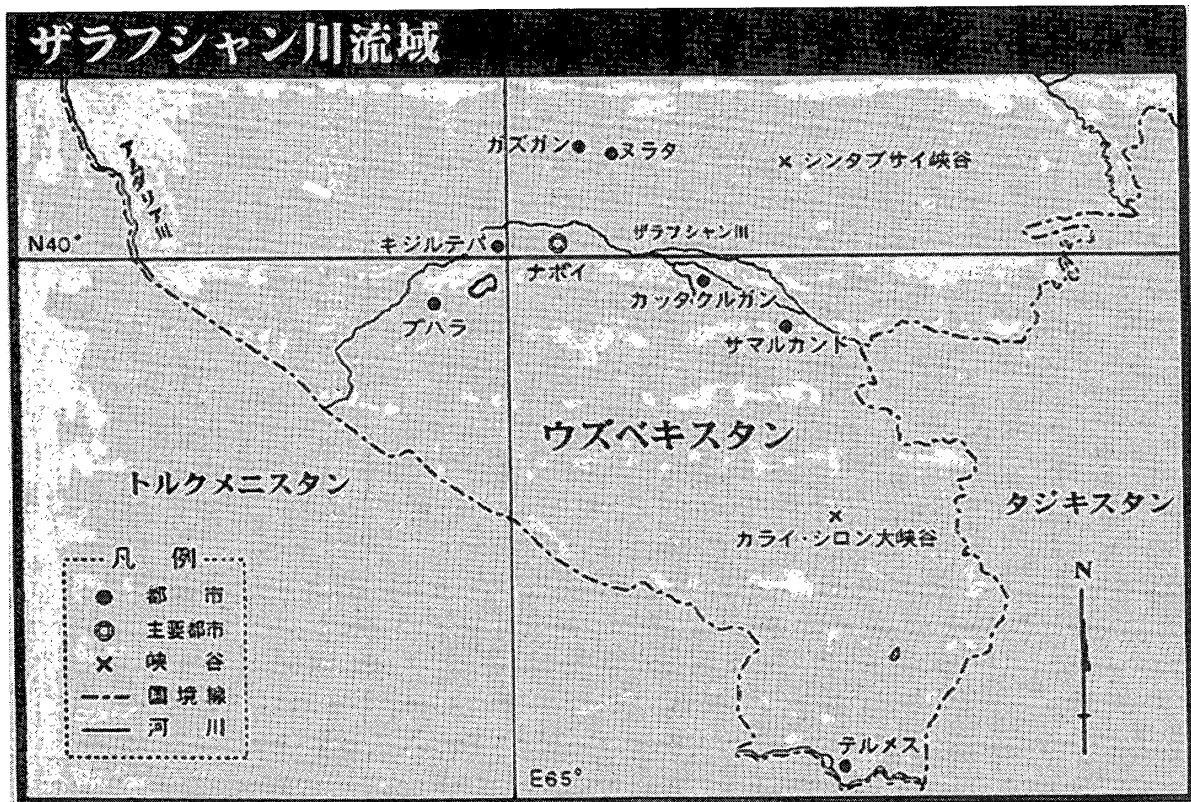


図2 ザラフシャン川流域鉱山地帯

上水・下水設備、他の多くのインフラストラクチャーの整備によって支えられている。こうした開発によりオアシスの街は、緑地、噴水、プール、空調設備などを備えた近代都市へと変貌を遂げてきた。これほど大きな鉱業と企業が存在するのは稀である。また、他に類を見ない自然の歴史的・文化的モニュメントも多く存在する。蛇足として、前述したが歴史の中でもキジルクムの豊富な鉱物資源は無尽蔵とも思われており、黄金にまつわる古い伝説の所以は、そこにある。ペルシャの王マケドニアのアレキサンダーが、この地域への侵攻を熱望した理由もそこに窺える。

b. ブカントウ山の驚異

ウズベキスタンにとって重要な鉱物資源を多く埋蔵している。この地域の金脈は世界的にもよく知られており、ムルンタウ (Muruntau) 山コンパタス (Kokpatas) 山、ダウギズタウ (Daugyztai) 山などがその代表例である。キジルクムの山々は、ほとんど侵食によって形成されたため、その形状は穏やかで、太古の時代から存在する丘陵も多く存在する。タムディタウ (Tamdytau) 山地の死火山アクタウ (Aktai) 山が、キジルクム周辺を含むウラル山脈の中で最も高い山である。キジルクム砂漠南東部境界付近に切り立つ高い山を除けば、アクタウ山、ヌラタウ (Nuratau) 山、カラタウ (Karatau) 山などがキジルクムの脊柱をなす山々である。銅はジラブラック (Zirabulak) 山、ジアディン (Ziatdin) 山、ヌラタウ山などで採掘された。青銅生産の中心は、現在のアクタシュ付近、当時はラビンジャン (Rabindzhan) と呼ばれていた地域であったと考えられている。このラビンジャンは13世紀初頭、チンギスハーンの侵攻によって破壊された。トルキスタン (Turkistan) について書かれた19冊からなる文献 [Russia Complete Geographical Exposition] (V.Masalysky, 1913) には、この地域の豊かな鉱物資源と金についての記述がある。一時期、ナボイ地域の金の埋蔵に関して疑いの目が向けられた時期もあったが、現在ではこの地域にあるムルンタウ (Muruntau) 山が世界有数の金の産出地域となっている。加えて砂漠地域ではウランの採掘も行われており、技術革新が砂漠でのこういった有用鉱物資源の大規模な採掘が可能になった。この50年でナボイは大きく変貌し、Navoi Mining Metallurgical Combine (NMMC) という巨大企業が生まれ、独自の巨大複合産業地域をこの地域に形成し、都市は著しく発展した。この企業体はキジルクムの宝物 (鉱物) を独占しており、調査が進むにつれさらに新しい金鉱脈も見つかって、益々この地域の砂漠の支配者と化している。また、多様性のある雇用促進を唱え、この企業体が中心となり行政ができなかったナボイ周辺の地域振興のプロジェクトを計画している。



ナボイの金の露天掘



ヌラタのモスク

c. ヌラタ

ナボイの北に位置するヌラタウ山地へのアクセスには、バスの利用が一般的である。ここではヌラタの泉（現地語でチャシュマ:Chashma）が有名である。モスクの裏庭から湧き出る水は澄み切って神聖さとともに清涼感をかもし出しているが、実際は泉が有名なのではなく、その泉から取水するカレーズ（地下水路）が有名で、非常によく配備された構造物である。長い年月を掛け、現地のエンジニアが作りあげたものであり、今日も使用されている。興味深いのは、この地域に住む人々の生活、家畜、作物、樹木の生命が何世紀にもわたって、このたった一つの泉からひかれる水によって支えられてきたという事実である。また、ヌラタはこの泉によって作られてと言っても過言ではない。長い歴史を通して泉は神聖なものとして崇められ、その水が病気に効くという噂がひろまり、多くの巡礼者が遠方からも訪れている。水が湧き出る場所は、キューブ状の構造物が建てられている。地下水路にせよモスクにしる、こうした建造物は、何度も修復され、また大理石などによって装飾しなおされ使われてきた。この泉には、マリンカ（marinka）という草食魚が大量に生息しており、この魚も昔から神聖なものとして崇められていた。マリンカの存在が、その水の清らかさを表すと信じられており、訪問者のここでの些細な楽しみはマリンカに餌を与えることである。生後5、6年経った成魚は人間を全く恐れない。人間の手のそばにやってきて、直接、その口に餌を与えることも出来る。

d. ガズガンのモスク

ムハンディスの造った大理石のモスクがガズガンにあり、その美しさと独創性は広くその世界には知られている。大理石のモスクというと、ステップのタージマハールのようなものを想像する者もいるかもしれないが、ガズガンのモスクはかなり趣を異にする。そのモスクがある同じ敷地内には、3つの構造物が建設されている。祈りの場でもあるドームは、ハズラット・

アリ・シャヒマルドナ (Hazrat Ali Shakhimardona) の埋葬された大霊廟とも考えられている。中央にはマクバラ (makbara) と呼ばれる塔と地下室があり、巨大に成長したと伝えられているアリを表していると言われ、その高さは8メートルもある。そこには祈りの場となっているモスクがあり、4本の大理石のパネルが張られた大きな支柱に支えられたドームの中央天蓋は2層構造になっている。また、天蓋から半分くらいの高さのところに8つの明り取りの窓が開けられ、この窓が喚気窓の役目も果たしている。通常、モスクにはメッカの方向を示す穴が開けられているが、このモスクにはその穴が開けられていない。この大理石のモスクに関して強調して置きたいことは、その曲線の美しさである。こうした大理石のモスク建立のスポンサーはブハラ王族であったと言われている。しかし、砂漠の果てにある小さな村にこうした大理石のモスクを建立するのは非常に稀なことであった。現在ガズガンにある美しい大理石のモスクとシャヒマルドナの大霊廟が完成するには、更に41年の月日が必要で、他の偉大な先人たちもこの建設に携わった。こうした建造物をガズガン大理石で建立することによって、ムハンディス自身が利益を受けることは無かったが、ガズガン大理石の建材としての適正を世に知らしめる結果となった。大理石を使ったシャヒマルドナの大霊廟の建築様式は、ウズベキスタン国内で20世紀に建立された建造物に多大な影響を与えている。

e. ズリカーナイ

入り組んだ渓谷に沿った道を進むと、両側が切り立った岩肌、または岩の斜面になっている場所を通る。ここは以前水が流れていたこともあったが、今では2、3の泉からわずかに水が流れ出ているに過ぎない。この岩の壁に囲まれた地区には、ズリーカーナイ (2本の角) という小さな集落がある。マケドニアのアレキサンダーがこの地域にやってきたと言われている時代に、そう名付けられた。その岩肌には、サクーマサゲト人によって彫られた岩絵、馬カルトの岩絵がある。サク (sak) 人とマサゲト (Massaget) 人は、青銅の時代紀元前2000年ごろにこの地域を支配していた遊牧民族であり、この2つを合わせてスキタイ (skitai) 人と呼んでいる。これまでの研究では、これらは全て自然の造形物だと考えられている。水による侵食、風による風化、地震など長い年月をかけて何度も繰り返されるうちに、こういった自然の造形物が造られ、そして破壊されたと考えられている。現在では、そのモニュメントの大部分が破壊されてしまっているが、スフィンクスのような形をしたものも残っている。そのスフィンクスのような岩は一枚の岩盤で出来ている。スフィンクスの岩を超えて更に渓谷の奥に進むと、急に開けた場所に出る。そこには古代の集落跡がある。その集落跡の近くには、地元の人々に崇拝されている2つの自然のモニュメントがある。ひとつはタシュクダック (tashukuduk) と呼ばれている岩である。妊娠していつ女性がその岩を見ると、生まれてくる子が男か女か判断できると言われている。そしてちょっとかわった緑色をした大きな岩が横たわっている。これには病

気に効く岩だと言われている。その岩を削ったものも病気に効くと信じられている。まるで人の手が加えられように不思議な形をした岩の造形があるが、それらは全て自然の仕業である。我々人間に自然の営みの不思議さを教えてくれる貴重な場所である。キジルクムには、独特の地形、特殊な植生と動物、非常に重要な鉱物資源、オアシス、そして大規模産業地帯が混在している。そして山地や丘に隣接して流れるザラフシャン川とその谷によって彩られ、川沿いには古代の街と近代の都市が点在している。

f. キジルクムの動植物

ウズベク語ではカフラック (kavrak) とよばれているキジルクムのウイキョウ (fennel) は、長年にわたって学問的にも研究され、キジルクム砂漠の植物相を代表する植物として数多くの文献や新聞などで紹介されてきた。ウイキョウは地形によって群生する。二人のジャーナリスト、シュキルバイ・アクナザロフ (Shukirbi Aknazarov) とアナフィール・イズテロフ (Anafir Izteleuov) がウイキョウの特徴について興味深いレポートを書いている。またウチダック、カニメッシュ、タムディ、ヌラタ地区に住む牧畜業者が、食した場合のその遺伝的影響について報告している。



図3 サルミッシュを中心とした観光事業計画図

太古の昔から、キジルクムに住む人々にウイキョウは薬用として珍重されてきた。特にその根は、リウマチ、腰痛、肺炎、肝臓病、胃炎、皮膚病などに対して効果があると言われている。キジルクムの老人たちはキジルクムが天災や戦争によって飢饉になると、このウイキョウの根を食べて命を繋いでいたという。ウイキョウは古代からキジルクム以外でも珍重されてきた。

キジルクムでは、雨がほとんど降らないという特殊な気候条件の下、植物と動物が密接に関わり合いながら命を育んでいる。そのため、この地域に生息している動物は独特な生態を形成している。

Ⅲ. 脱シルクロード観光の期待と挑戦

現在、ナボイコンビナートの企業経営者連合が行政にこの地域の活性化の方法として第一次産業の他に第三次産業の観光に関わるインフラの整備を呼びかけていおり、サルミッシュのペトログラフィ（呼称：線画岩絵）のユネスコ世界遺産登録への進展が急務となっている。

ここ数年、これに対して政府機関も熱心になってきているが、資金的な面を含め幅広く外国のバックアップが必要な状況にある。また、研究者を中心として、国内における文化遺産としての啓蒙活動、海外におけるPR活動は活発になってきている。特に、一昨年のノルウェーのオスロ、昨年のロシアのモスクワで行われたプレゼンテーションでは高い評価を受けている。また、この活動に招聘されたのを期に、観光事業を研究するものとしてサルミッシュのペトログラフィと日本に紹介すると共に、ODAによるウズベキスタンの観光事業促進の助力を、日本政府に訴えているところである。



サルミッシュのオアシス



サルミッシュの壁画

a. サルミッシュ渓谷の自然、歴史、文化遺産

ナボイの北約40キロメートルの所にあるカラタウ (Karatau) 山地に、サルミッシュ (Sarmish) 渓谷はある。花崗岩のゴツゴツしたその渓谷は、夏は40度、冬はマイナス10度を越える過酷な気象条件下にあり、その岩盤は、 SiO_2 、 CaCO_3 、C、 Al_2O_3 といった成分を多く含んでいる (Hygen, 2002)。そのサルミッシュ渓谷で発見された岩絵は、紀元前5000年から7000年ごろに描かれたものだと考えられている。岩肌に描かれた岩絵は約3000点にのぼる。残された岩絵から、我々は当時の人の生活、文化、歴史の一端を知ることができる。サルミッシュ渓谷とその岩絵に関する調査は、サマルカンド、タシケント、モスクワ、サンクト・ペテルブルグ、イルクーツクの科学者、および、カザフスタン、ポーランド、ウクライナの科学者によって行われた。サルミッシュ渓谷の岩絵から分かる当時の様子として、サルミッシュ渓谷およびその周辺の自然の状況があげられる。古代の狩猟民族はサルミッシュ渓谷とその合間を流れる溪流を崇拝しており、水の豊富なこのあたりでは容易に野生の牛、鹿、山ヤギ、羊などの獲物をとることができたと想像できる。水の存在と獲物の豊富なことからこの渓谷は古代の人々から崇拝され、人々は岩石だらけの渓谷から抜けた溪流の下流部分に広がる平野部に住んでいた。このあたりは夏と冬それぞれに対応できる居住環境が整っており、南側の岩山にある洞窟を居住空間として彼らは利用していた。しかし、何千年もの時の流れは人々に生活スタイルの変化をもたらし、この地を離れて行くようなこととなった。人々の生活方法は、野生動物の狩猟に頼るものから、羊やヤギを使って牧畜を営む生活へと変化し、山間部の森の恵に依存する必要がなくなった。また、山間部を流れる溪流が干上がり、乾燥が激しくなったことなどの理由で、古代に人々はサルミッシュ渓谷から消えていった。しかし、サルミッシュ渓谷周辺も、他の渓谷と同じように灌漑農業技術の発達によって、新たな土地利用が行われ始める。溪流兩岸の耕作可能な土地には、果樹園やブドウ畑が造られ渓谷内には水路も建設されて、高台でも果物の他にきび、ムラサキウマゴヤシ、大麦、マメ科の植物、野菜なども栽培されるようになった。人々は平野部の洞窟ではなく、渓谷内の岩場に住居を造り生活していた。当時、この地に生息していた野生動物は、自然淘汰によって絶滅してしまった動物もいるが、人間が絶滅に迫りやっってしまったものも多い。これらについては、ムヒディン・M博士のサルミッシュ渓谷の岩絵をまとめた文献「レッドブック」に掲載されている。

サルミッシュ渓谷は、20世紀初頭、人々の憩いの場であった。溪流の上流部では昼間、太陽が見えないほど木々が生い茂り、川の流れを包み隠していた。場所によっては泳げるほど豊かな水があった。当時この地を訪れた生物学者ボダノフ (O. Bogdanov) は、溪流内に泳ぐ大きな魚の群に大変驚いたと著書の中で記している。

上流部では金が採掘され、採掘用及び採掘者の生活用の燃料として周辺の木々を切り倒した。こうしたことが、サルミッシュ渓谷の砂漠化を更に加速させた。自称「考古学ファン」の観光

客がサルミッシュ渓谷を訪れ、土産代わりに岩絵を削り取って持って帰った。田畑はブルドーザーで均され、その後にトラック用の道路が建設された。ロイリク・ダム建設が行われ、渓谷内には人造湖が誕生した。サルミッシュには、子供用のキャンプサイト・ゴルニー（Gorniy）がオープンし、現在ではウズベキスタンでも屈指の緑地となっている。

視点を都市に移すと、2001年10月に米国がおこしたアフガン戦争により、ウズベキスタン南部からアフガスタン北部に作戦を展開する米軍、軍属、マスコミ関係者及び他に対応するために、首都タシケントの宿泊施設が充実し外貨獲得にもつながったりするという皮肉な現象も起こしている。また、年々に充実度を増してきている各形態の宿泊施設に答えるためにも、従来のシルクロード一辺倒の都市、施設を中心とした観光に頼ってはこの国における観光の将来の発展を妨げてしまうことになる。まだ開発されていない新しい観光ルート、観光資源を組み合わせる幅広い観光事業を創出、展開して行かなければ、経済の一翼を担う産業の地位を観光産業が得ることはできない。

注) アフガン戦争（アフガニスタン戦争）は、1838年からヨーロッパ列強の利害関係に巻き込まれながら近年まで幾度もの戦争、内紛などを繰り返された歴史がある。今回は、米国の9.11同時多発テロ事件が背景となっているが、これも含めアフガン戦争と一般に呼んでいるところがあるが、正確には米国・アフガニスタンの戦争と呼ぶべきかも知れない。

おわりに.

20世紀の中で偉大な国際的影響力を誇っていたソ連が崩壊して、地球上のいろいろな結びつき、政治的パワーゲームが一変してしまった。また、その強力な傘下にあった中央アジア諸国はイデオロギーから価値観まで急変して自由国家を基本とした地球社会の競争の下に組み込まれていった。10年を超えた独立国家としての歩みから、これからの各々の方向性を読み取れる段階に近づいたといえる。また、各国は国内の地域単位で産業振興を推進するべき指導もできるようになった。ここであげているナボイは、一昔前には重要産業都市ということで国家秘密となって地図上に載ってもいなかった。今だ、はっきりしたデータを把握することは困難であるが、民営化が進んだことでナボイの企業家連合と国際間のビジネス環境や研究機関の共同研究などが行える状況が整ってきた。その状況の中で、第一次産業の見直しや整備の他に観光・ホスピタリティビジネスの発展と拡大ということで、“シルクロード観光からの脱皮と挑戦”という冒険に取り組んでいる最中であり、成功、不成功に関わらず、この国における観光事業構想の模範と何らかの刺激になり観光・ホスピタリティビジネスの拡大につながれば幸い考える。我が日本国としては、ODAを活用して空港を中心とした観光、交通のインフラ整備に相当な力を注いできた。また、ソフトの件ではJICA（海外青年協力隊）、他の機関、民間、またボランティアなどから日本語講師、ビジネスコンサルタントが派遣され観光ガイド、ホテル従

業員の育成や一部の旧インツォリスト系観光事業従事者に対して再教育が施され、ビジネスの意識の改革がなされつつある。また、観光とビジネスの一般化と共に旅行者に安価で一定のレベルの宿泊を提供するということで、B & B 形式の宿泊施設の経営が銀行の個人貸付緩和を背景に定着してきている。また、前述したように戦争という皮肉が、欧（西側）米的なホテルビジネスの拡大をもたらしている。さらに、この研究を進展させ発展途上国観光・ホスピタリティビジネス支援の一策としての確立した観光事業構想論を説けるように努力を続ける所存である。

謝 辞

この研究は、文部科学省の科研費活用した京都大学経済研究所（環境経済部門）、東京農工大学、宮城大学とウズベキスタン共和国科学アカデミー、ウズベキスタン共和国教育省、国立サマルカンド外語大学との国際共同研究の一環として行ったものであった。特に、今回の調査中のテロ防御に心痛された京都大学の塚谷恒雄教授と医療管理を担当してくれた京都大学大学院生のナデル・ゴトビ医師には、この場をお借りして謝意を表する次第です。

参考文献

井筒俊彦（1991）『イスラム文化』、岩波文庫。

宇山智彦（2000）『中央アジアの歴史と現在』、東洋書店。

加藤九祚（1995）『中央アジア歴史群像』、岩波新書。

塚谷恒雄（1997）『環境科学の基本』、科学同人。

淵の上秀樹（2002）『中央アジア管見』、『平成13年度年次報告者』、中央アジア研究所、p56～255。

間野英二、中見立夫、堀直、小松久男、（1992）『内陸アジア』、朝日新聞社。

中央アジア（CENTRAL ASIA RESEACH INSTITUTE）ホームページ。

三橋 勇（2002）『1990年代の中央アジアにおける市場経済の転換期の観光事業とその将来展望』、宮城大学事業構想学部紀要2001、p61-89。

淵ノ上英樹¹、塚谷恒雄²、三橋勇³、ボリス・シャラトニン『キジルクムの自然、歴史、文化遺産』、Kyoto Institute of Economic Research Discussion Paper No,0303。

CIS 統計委員会、UN 世界統計年鑑資料。

Fuchinoe H. Tsukatani T. and Toderich K. (2003) : Riparian state cooperation for irrigation of the left bank of Amu Darya River, Advanced Research Workshop, NATO OTAN, p3-19

Fuchinoe H. Tsukatani T. and Toderich K. (2002) : Afghanistan Revival : Irrigation on

the right bank and left bank of AmuDarya, Kyoto Institute of Economic
Research Discussion Paper No,554

Hygen A. (2002) : First mission to Samarkand and Sarmishsai valley, RIKUSANTIK
VAREN DIRECTOR ATEF OR CULTURAL HERITAGE, Oslo, Norway, p7-
36

Shalatonim B. (1997) : ONE THOUSAND UNIQUES OF KYZYKUM, Sketches and
etudes about nature and historical-cultural heritage of Navoi area, Navoi
Regional Committee of Nature Guards.